

「受賞者の言葉」

『中国開発学序説：非欧米社会における学知の形成と展開』 法政大学出版社 2024 年

汪 牧耘（WANG Muyun）

大来佐武郎の生誕 110 周年の年に、その名を冠した賞を戴くことをとても嬉しく思っております。日本戦後史において、「世界人」と振り返られる大来が、何を「国際」とし、いかなる「開発」を想像していたのか。1970 年代に始まる日中経済知識交流会をはじめとする両国の知的往来を追う過程で、大来が架け橋となった国際開発の現場に思いを馳せることは少なからずありました。中国からの留学生として来日した私にとって、それは、異なる時代を貫いた越境者の気概に触れ合うことであり、両国の狭間を生きる自らの足元を見つめ直すことでもありました。

本書は、2022 年度に東京大学に提出した博士論文をもとに執筆いたしました。大来が見届けられなかった 1990 年代以降の中国で生まれ育った私の関心は、中国の経済を成長させるための開発というよりも、中国と国際社会を繋ぎなおす核心的な現場としての開発に向けられてきました。中国の海外進出は賛否両論を呼んでいます、そもそも中国における「開発」概念はどこから来たのか、中国の国際開発は一つの知的現場としてどのような可能性を持ちうるか——こうした問題意識に応える方法として、本書は開発学という言説空間に着目し、中国における国際開発の学術研究の形成と変遷を文献調査とフィールドワークから明らかにすることを試みました。それを通して見えてきたのは、中国の開発経験が、実は国境を跨ぎながら他国と絡まり合っていることです。その同化でも対立でもない関係性は、今日の国際開発を検討する上でも有益な手がかりになっていると考えます。

法政大学出版社の担当編集者が、本書の原稿を読んで「珍獣発見」という感想を漏らしたように、本書を特定の学問の系譜に位置づけ評価することの難しさは私自身も感じてきました。そうした中、「大来賞」という歴史ある賞をいただき、特定のディシプリンに強く依らずとも開発への探究を受け止めていただけたことを心強く感じています。本書は正体をつかみ切れない中国開発学の輪郭を描こうとする試みにすぎませんが、国内外の現場で「より良い生」の在り方を模索される方々、そして様々な学問分野の知見を横断しながら国際開発研究に真摯に取り組もうとする方々に向けて、それぞれの挑戦への小さな励みとなれば嬉しいかぎりです。

日本に留学して以来紡いできた国際開発への問いは尽きることがありません。それは今、アジアにおける国際開発知の変転と環流へ、そしてその実践者である自分自身へと深まりを見せています。中国で生まれた「開発」概念は、その誕生時には「内発的な力を引き出し、本来の状態に成る・戻る」という意味を持っていました。この当初の意味合いを考えると、中国の大学で漢方薬を学んでいた私が十年前に日本へ渡り、今ここに至る道のりは、図らずも一つの「国際開発」の物語のように思えます。それは、留学を通して引き出された自らの可変性に気付く過程であると同時に、豊かさや先進性にまつわる強迫観念を、研究を通じて相対化し、本来の自由闊達な精神を取り戻す旅路ともなっています。

大来佐武郎をはじめとする先人たちが、それぞれの時代と真摯に向き合ったように、私もまた、自らの問いかけの赴くままに新たな地平を切り拓いていきたいと願っています。末筆ながら、この道のりを見守り続けてくださった恩師、心友、家族に、心からの感謝を捧げます。

略 歴

(おう まきうん / WANG Muyun)

東京大学東アジア藝文書院特任助教。中国貴州省生まれ。2018 年法政大学大学院国際文化研究科修士課程修了(国際文化)。2022 年東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了(国際協力学)。東京大学東洋文化研究所特任研究員を経て、2024 年 4 月より現職。都留文科大学、国際基督教大学非常勤講師。専門は開発学、対外援助研究。「より良い生」をめぐる感覚、記憶や言説の知識化に関心があり、中国や日本、そして東南アジアをフィールドとして、国際開発の学問的な系譜をドキュメント分析と現地調査から浮き彫りにすることを試みている。

主要著書・論文

第一、開発学の構築をめぐる試行錯誤:「特集『国際開発学における日本の境位を探る:越境者のオートエスノグラフィーを方法として』について」「結びにかえて:多遍世界を共生する国際開発学」(共著)、(『国際開発研究』33(2)、2024 年)、「中国における国際開発研究の受容と展開:脱『欧米中心主義』の可能性の一考察」(『アジア経済』64(3)、2023 年)、“Imagining Pluriversal Development Knowledge Production Via Japan as Method”(共著)(*The Semantics of Development in Asia: Exploring ‘Untranslatable’ Ideas Through Japan*, Jin Sato and Soyeun Kim (eds.), Springer, 2024 年)、“Development Knowledge in the Making: The Case of Japan, South Korea and China”(共著)(*Progress in Development Studies* 23(3)、2023 年)など。

第二、特定の開発言説の分析:「『より良い生』と共生の相克を超えて:『人民日報』の肉食言説に基づく問題提起」(『ともに成り行く道、ともに花する世界』、柳幹康編、東アジア藝文書院、2024 年)、「中国からみる日本の開発協力大綱:文献レビューに基づく視点の沿革と現状の分析」(『国際開発研究』33(1)、2024 年)、“Parallaxes in the Developmental Experience in Asia: How the ‘Saemaul Undong’ is Reviewed in South Korea, Japan, and China”(共著)(*Journal of International Development Studies* 32(2)、2024 年)、“The Trinity of Aid, Trade, and Investment: The Reemergence of a Japanese-Style Development Term as China Rises.”(*The Semantics of Development in Asia: Exploring ‘Untranslatable’ Ideas Through Japan*, Jin Sato and Soyeun Kim (eds.), Springer, 2024 年)、「『開発=开发(カイファー)』の意味変容と概念形成:日中における言葉の借用を中心として」(『国際開発研究』29(1)、2020 年)など。

第三、開発事業の現地調査:“Exploring Common Space of Valuation: A Case Study on the Changing Historical Narratives of Shimenkan Village”(History and Theory of Common Spaces, Yuki Tanaka(ed.), East Asian Academy for New Liberal Arts, 2024 年)、「減貧経験輸出的困境と挑戦:対援老项目的中期考察」(中国語)(『中国農業大学学报』37(6)、2020 年)、「『生き物』としての開発協力:中国貴州省にみる世界銀行と事業の現地化」(『国際協力と想像力』、松本悟・佐藤仁編、日本評論社、2021 年)、「中国・石門坎の観光資源化プロセス:政府と諸アクターの相互作用に着目して」(『白山人類学』22、2019 年)など。